

学会ハイライト

第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会を終えて

(平成27年10月17日(土), 18日(日), 長崎ブリックホール・長崎新聞文化ホールにて)

宇谷 厚志

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚病態学教授

はじめに

平成27年10月17日(土), 18日(日), 長崎市の長崎ブリックホール・長崎新聞文化ホールにて第67回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催させていただきました。この2日間は晴天に恵まれ, 800人を超す参加者が全国からおいでいただき無事盛会裡に終了できました。参加いただいた会員をはじめ各講演, シンポジウム, ワークショップの講師・座長の先生方, 日本皮膚科学会西部支部の運営委員の先生方, また運営事務局の皆様, 長崎大学および同門会の先生方のご尽力に, 会長として厚くお礼申しあげます。

学術大会のテーマ

日常診療のなかで「こういわれているけど本当かな?」と思うようなことに出くわすことがあります。これに答えるすべはあるのか? 医療はエビデンスを重視しようという流れになってきています。そのエビデンスを求めるために, すべての疾患, 項目について自分で検討するわけにいけないので, 昔から良質の論文を広く渉獵することが唯一の道といえます。最近ではネット検索が進んでいて, 論文は簡単にかつ遅れることなく読むことができます。この簡便さの結果, ガイドラインが盛んに作成され, エビデンスを得る個人の手間を大幅に省いてくれています。またフローチャートに従えば専門科と同じ診療を行えることが可能な疾患も増えてきました。しかし気になる項目やそ

もそも疾患自体がエビデンスレベルの低い論文しかないものもまだまだあり, 自分の考えで診療をしなくてはならない部分は少なくありません。

これまでの先達の残した経験を尊重しつつ, なぜこの方法が行われているのか? ベストな診療はなにか? 帰納法は通用するのか? などの疑問をもつのは大切です。しかし忙しい日常診療ではそのような機会は, まずもてないと思います。そこで本学会をそのような場にしていいただければと思います。

今回の学会は『本質を見抜く』See through the Essence behind Common Knowledgeをテーマに掲げました。多忙な日常診療のなか, 好奇心を刺激する学会になればとの思いをこめました。今大会は, 招待演者にご無理をお願いし, できるだけ「疑問形のある演題」にしてもらい, これだけは覚えて帰ろう (take home message) と思ったときに有用と思いました。さらにコングレバッグ手渡しのところ, コクヨ学会メモ用ノートを無料配布し, 必要な参加者に適宜活用してもらいました。

招請講演と特別企画

招請講演は, 米国・コロラド大学デンバー校皮膚科教授の藤田真由美先生に, 「アメリカでのメラノーマ治療と研究: パーソナライズド・メディシンはどこまで有効か?」と題し, ご専門のメラノーマ研究を中心にご講演いただきました。米国で先行して実施されている分子標的薬, イムノチェックポイント薬をわかりやすくご講演いただ

き、引き続き、薬剤耐性をおこす1つの機構として注目されているメラノーマのcancer stem cellを同定しようとする試みは刺激的で興味深いものでした。米国で臨床教室の教授になられた先生の、失礼ながら非常に女性らしい話し方・外観に秘められた、本質が垣間見えた気がしました。

教育講演

「EBウイルス関連疾患」と「紫外線高感受性疾患」の2つだけに絞り、基礎と臨床のそれぞれの視点から講演していただきました。2つにすることで、臨床演題の時間帯に他の講演などができるだけ重ならないように配慮したつもりですので、臨床演題の会場の入場者もしっかり確保できた結果には安堵しました。

「EBウイルス関連疾患」では藤原成悦先生(国立成育医療研究センター研究所 免疫アレルギー・感染研究部)に、マウスに感染しないEBVの病態を解明するためにヒト化マウスを開発し、それを用いた感染様式を解明した経緯についてご講演いただき、基礎研究の有用性を実感させていただきました。岩月啓氏先生(岡山大学)には幅広くEBV感染症の皮膚疾患、とくに先生が見出された種痘様発疹症をはじめ、種々の病態を講演いただきました。皮膚科におけるEBV感染症の重要性を再認識しました。

「紫外線高感受性疾患」では、荻朋生先生(名古屋大学環境医学研究所発生遺伝分野)にXPやコケイン症候群の分子診断法の確立に至った世界をリードする研究のご講演を通して、基礎研究と臨床分野のsynergistic collaborationを実感できました。臨床面では錦織千佳子先生(神戸大学)にXPの日本における現状、臨床面での特質などわかりやすくご講演いただき、これから大きく発展する分野であると思いました。

シンポジウム

4つを企画し、私の研究テーマである「細胞外マトリックス疾患」のほか、「進行期皮膚悪性腫瘍の治療戦略」「見逃してはならない感染症」「皮膚病理

学」を第一線で活躍されている講師に講演いただきました。「細胞外マトリックス疾患」では岡本修先生(大分市アルメイダ病院)にデルマトポンチン、茂木精一郎先生(群馬大学)に強皮症の線維化、岩永聡先生(長崎大学)、大久保佑美先生(長崎大学)に弾性線維性仮性黄色腫、簗持淳先生(獨協医科大学)にエーラス・ダンロス症候群の講演をしていただきました。「進行期皮膚悪性腫瘍の治療戦略」では、並川健二郎先生(国立がん研究センター)にメラノーマ分子標的薬、福島聡先生(熊本大学)にイムノチェックポイント治療薬、村田洋三先生(兵庫県立がんセンター)にメラノーマ以外の皮膚癌の化学療法、鉦塚大先生(長崎大学)に血管肉腫、米倉健太郎(今村病院分院)にATLの講演をしていただきました。「見逃してはならない感染症」では、岩田洋平先生(藤田保健衛生大学)に壊死性筋膜炎、富村沙織先生(長崎大学)に真菌感染症、山口さやか先生(琉球大学)にハンセン病、高垣謙二先生(出雲市高垣皮膚科クリニック)にリケッチア感染症をご講演いただきました。「皮膚病理学」では、玉田伸二先生(徳島市日本皮膚病理診断研究所)に表皮内メラノーマ、安齋眞一先生(日本医科大学武蔵小杉)にケラトアkantoma、陳科榮先生(目黒陳皮膚科クリニック)に血管炎、大塚幹夫先生(福島県立医科大学)にはMFをご講演いただきました。4つのシンポジウムの入場者は感染症がほんのわずかだけ多かったですが、あとは横並びでよい企画ができたと考えました(図1)。

ワークショップ

今回は、西部支部の各大学から臨床・基礎を問わず研究成果を報告していただく企画を作りましたが、昔から「大学は研究する場」と認知されていますが、最近、大学にいる先生には研究は専門医の“次のレベル”という考え方が多くなっています。一方で大学に「研究することを期待している声もはっきりと聞きます。時間的、人的な制約のなかで行われている研究を発表していただきました。この主旨にご賛同いただき、西部支部から16もの多くの、バラエティーに富んだ特色ある演題が出



図1 今村京都大学名誉教授(左), 会長(中央), 藤田真由美教授(右).

されました。しかも発表を1~2題ずつ「臨床報告」に関連しているセッションのはじめにはめ込みました。このことで、研究に触れにくい先生にも少しでも研究を紹介するという目的が達成できたと考えます。研究している先生が少しでも多くの参加者の前で発表できた場を支部総会で作ることができ、研究する先生が小さな達成感を感じることに役立ったのではと考えています。これが、本質は何かを考える「好奇心」があふれる皮膚科医師の育成の契機になれば嬉しく思います。

一般演題

153題の一般演題、そのポスターも同時に作成していただきました。時間の許すかぎり自由な雰囲気の中で質問をして、診断名がその場で変わるくらいの熱心な討論を行っていた会場もみられました。学会の本当の目的、「本質に向かう自由な討論」が少しではありますがみられました。

学術文化講演

ブライアン・バークガフニ先生(長崎総合科学大学・人間環境学部環境分化学科教授)に「長崎居



図2 桃カステラで一服

留地と西欧医学の発展」についてご講演いただきました。長崎を一地点だけ西欧に開いた江戸幕府の思いと、明治になりそこから西欧医学が発展する流れを講演していただきました。外界との完全断絶は将来のあらゆる可能性を0%にしてしまう危険性があり、1%でも交流を持続することは変化に順応するために必要なのだと考えました。

呈茶

長崎大学歯学部茶道部の皆さんに裏千家のお茶



図3 稲佐山の招宴会。会長 宇谷(左)、宮地京都大名誉教授(中央)、新海千葉大学名誉教授(右)。

を点てていただきました。お菓子は「桃カステラ」という不思議なものです(図2)。疲れた前頭葉に糖を送り込んで、お茶ですっきり血糖値を下げて「いざ会場へ」と向かう気にさせる一服となりました。皆様は如何だったでしょうか？

お土産など

コングレバッグは長崎名物のプリントのある4種類のトートバッグにしました。あくまで長崎色を出そうという長崎地元出身教室員と移住者である会長の折衷案で4絵柄を決めました。ランチョンセミナーなどのお弁当も医局で試食会を皆でして投票で決めました。長崎の特徴を出せた美味しいお弁当になりました。座長、招待演者の皆様には長崎の本龍甲の動物ストラップを会長が選びました。

稲佐山の招宴会(図3)

夜景、芸者さんのお祝い踊り、竹中基準教授(学会事務局長)厳選のワインなど、皆様から大変好評を得ました。

懇親会

グラバー園からの風景は世界3大夜景に選ばれているものです。また2015年に世界遺産に選ばれました。

「雨がふったら」などということは考えないとい



図4 グラバー園からの花火。左端に会長。

う会長の意向を皆が察知して、それに2年後の天気予報には良質なエビデンスのある予報もガイドラインもないので、「雨がふったら没法子(メイファーズ)」でいこうと決めました。蛇踊り、皿うどんの細麺と太麺の食べ比べはいかがでしたでしょうか？ これは長崎では、鯨料理、ちゃんぽんとともに押さえておきたい一品です。

8時半からは眼の前の港(大波止港)から、30分間も花火が上がりました(図4)。皮膚科学会史上もっとも豪華な花火だったと自負しております。眼の前の高さに上がった花火がきれいに何発も途切れることなく花開くのを見ることができなのがグラバー園です。このベストポジションを皮膚科の皆様にご提供でき、それを満喫していただけたのは主催校として幸甚の至りです(あの花火は、借景としてのものであります。眼福)。

おわりに

何年か経ったころ、今回の長崎の学会が「皮膚病の勉強をもっとやろうと思ったきっかけになった」、そして「なにしろ豪華な花火の学会だった(笑)」と思い出してもらえると幸せです。

本学会に参加いただきました先生方、ご講演いただいた先生方、ご支援いただいた西部支部会員、長崎大学皮膚科同門会、教室員、運営事務局の皆様にご感謝致します。最後に学会準備に奮闘してくれた教授秘書の浦上伸子さんに深く感謝します。